隈研吾氏.

乾久美子氏.

藤本壮介氏.

池上一夫氏.

撮影：新建築社写真部

多世代，多国籍で生まれ変わる集合住宅

――核家族の居心地のよさが定着した現代におけるコミュニティの新しいかたち

第13回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×池上一夫

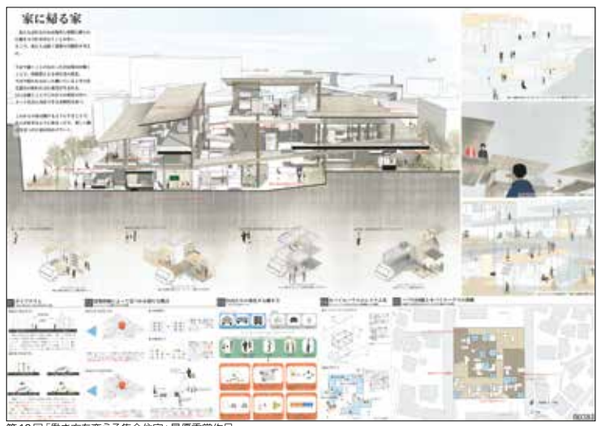
第13回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」は，2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念してスタートしました．これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらい，前回の第12回「働き方を変える集合住宅」では，多様化する働き方と集合住宅を結ぶ新しい提案を考えてもらいました．13回目となる今回は，グランドレベルの田中元子さんにもゲスト審査委員として参加していただきます．開催に先立ち，今回の課題や，今，集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方がたに話し合っていただきました．（編）

少し先の未来を見据えた思考実験の場

――今回のコンペではどのようなことをテーマに考えるとよいでしょうか．

隈　今回で13回目を迎えることになりましたが，毎回その時々でタイムリーな話題をテーマに集合住宅について考えており，前回の「働き方を変える集合住宅」は面白いテーマでした．

乾　社会的問題から建築を考えると，ハードだけでなく，ソフトも考えた設計が必要になりますが，応募案を見るとそれらのバランスを取ることに苦心しているように感じました．本コンペは少し先の未来を見据えた思考実験の場として，面白いアイデアの応募があり，意義のあるものになっていると思います．審査をする側もきちんと読み取っていく必要があるので大変でもあります（笑）．



第12回「働き方を変える集合住宅」最優秀賞作品
「家に帰る家」 水上翔太　門田大希（神奈川大学大学院）

藤本　前回のテーマは，まだ就職していない学生にとって難しい課題かと思いましたが，分からないことがある分，真剣に考えていたようにも感じました．入賞案はリアリティを持ちながら，かつ一歩先に踏み出そうとしているものでした．

池上　そうですね．どれも具体的に考えられており，プランもしっかりとしていたので感心しました．特に人が動くことにより，住まい方・働き方が変わるというような提案が多かったことが印象的でした．また，表彰式では優秀賞の「散歩者たち」のプレゼンテーションが，アニメーションを駆使した魅力的なものでした．設計者のアイデアを直接聞くことで審査結果も変わるように感じました．

隈　例年，1回の審査で入賞作品を決め，表彰式では最優秀賞と優秀賞の4作品のプレゼンテーションと入賞者との公開ディスカッションを行っていますが，1回の審査ですべての順位を決めてしまう必要はないのかもしれませんね．

藤本　確かにプレゼンは大事ではあると思いますが，コンペにおいて大切なことはプレゼンの表現力を評価することではなく，何かきらりと光るアイデアをきちんと掬い上げることではないでしょうか．プレゼンに重きを置きすぎるのも少し違うのではないかと思います．

乾　一方で，設計者の話を聞いてみたいとも思いますが，プレゼンが上手な方の案が必ずしもよいとは限らないので，どのようにして入賞案を決めるか慎重になる必要はあります．

隈　では，事前に上位4作品を絞っておいて，公開審査により最優秀賞，優秀賞を決定するのがよいのではないでしょうか．プレゼン用に新たに素材をつくるのは応募者への負担が大きくなってしまうので，公開審査では提出したパネルで使用した図版を使ってプレゼンしてもらいましょう．

多世代で教育を行う場

隈　前回のテーマは，働く場所と住まいの関係を改めて問い直すものでしたが，審査の過程で教育の場も同じように住まいから切り離されたものではないかと思いました．かつての住まいでは，親から子へと教育的なことを伝承していましたが，それが学校という機能が現れて住まいから切り離され一般化していったと言えると思います．現代の集合住宅では，同世代の人たちが住むことが多いと思いますが，そのような教育的視点を住まいに取り込んで考えることで，多世代が一緒に暮らす集合住宅があり得るのではないでしょうか．

池上　現代では核家族化が進み，多世代で暮らす家庭は珍しくなりました．さらにSNSが発達するなど情報伝達手段が増えていますが，生身での情報の伝達継承の機会が少なくなってきています．例えば，学童保育に高齢者がいたら，昔からある遊びや習字などを子どもに教えられるかもしれません．また，高齢者も子どもと共にいることで刺激を受け，心身の健康を保つことができるのではないでしょうか．実はそうした発想の延長として，当社が事業主として，賃貸マンションと高齢者施設，学童保育を複合させた施設を東京都北区に完成させました．誰でも利用できる交流の場をつくり，多世代が一緒にいることでお互いに利点があるようなコミュニティ創出を目指しています．

隈　それは面白い計画ですね．シェアハウスを多世代にしたような感じでしょうか．

乾　住まいと教育の関係から，多世代の人たちが住む集合住宅を考えるのは面白いと思います．これまで，住まいと教育の関係と言えば，寮に代表されるように限定されたあるコミュニティのためのものでした．それが多世代に広がることで，これまでになかった発想が出てくるかもしれません．

藤本　そうですね．僕の息子は幼稚園に通っているのですが，子育ては大変だなと日々感じています（笑）．例えば，休みの日に僕と妻の両方が仕事になってしまうと子どもの面倒を見ることができません．そのような時に同世代や上の世代の人たちと，うまく子育ての時間を共有することができないかなと思います．みんなで宿題をしたり，工作をしたりと学校教育とは異なる，堅苦しくなくコミュニケーションとしての広い意味での教育みたいなものを多世代間で創出できないでしょうか．

一方で，これからの時代は多様化に拍車がかかりますが，幼稚園や保育園は同じ地域に住む同年代の子どもたちが通う画一的な場のように思います．親としては子どもに多世代の人と交流してほしいと思うのですが，なかなかそのような場はありません．多世代で教育が行われるような場を考える意味はあるのではないでしょうか．

隈　最近ではさまざまな人種の人たちと交流してほしいと子どもをインターナショナルスクールに通わせる親が増えています．以前，あるインターナショナルスクールを見学したのですが，教室はリビングのような空間で，各々が好きな場所に座って先生が見て回るかたちで授業が行われており，家のような印象を受けました．つまり教育の場とは，住宅と大して変わらないものであり，集合住宅でもそのようにみんなが過ごせるリビングルームを設ければ，教育の場となり得るのかもしれません．

国籍を超えた新たな関係性

池上　実は，私の娘はシェアハウスに住んでいます．日中に自身が属するコミュニティとは異なる関係が心地よいらしく，また帰れば誰かがいるという安心感も大きいようです．そこは学生だけでなく，社会人や外国人も住んでいるようで，韓国人の住人が焼肉パーティーを開催するなど，みんなでさまざまなイベントを行って，楽しく生活しているようです．

隈　シェアハウスに外国人が住んでいると，同郷の友達を呼んで故郷の料理を他の住人に振舞ったり，その国の文化についてのレクチャーを開催したりとさまざまなイベントが起こるようです．日本人だけで生活する場合と違って，コミュニティの幅が広がるようですね．

乾　隈さんが仰ったように外国人が入ることでコミュニティが変わるというように受け手側のメリットもありますが，その反対に外国人を主体としたコミュニティを考える必要もあるのではないでしょうか．ここ数年で訪日外国人の数がとても増えていますが，外国人に住居を提供することについてこれまで考える機会がなかったように思います．支障なく日本で暮らしている外国人もいるでしょうが，多くの方がたが困難を感じているのではないでしょうか．例えば，外国人が日本に住む時に彼らだけの，もしくは日本人を含めたコミュニティ形成の場を用意してあげるなど働きかけが必要なのかもしれません．

池上　そうですね．インバウンドの増加により，外国の方が実際に住まうためのマンションを購入する機会も増えています．マンションの管理組合など，外国の方が他の住人たちとどのようなコミュニケーションを取っていくのか考える必要もあると思います．

藤本　暮らすということは，同じ時間を共有することになるので，シェアハウスのように物事が動き出しやすいのではないでしょうか．その一方で，一緒に住むことで考えなくてはならないデリケートな部分もあります．そうした相反する状況を考える切り口として，多世代・多国籍の集合住宅というテーマは大きな手がかりとなるのではないでしょうか．現代では核家族化によって希薄な関係性に物足りなさを感じる一方，核家族故の居心地のよさが定着しています．長屋のような昭和のコミュニティみたいに単に大家族的なものになってしまうのは少し気味が悪いです．そうした矛盾をうまく抱擁する可能性があるのではないでしょうか．

隈　では，今回は世代や国の違いが集合住宅を舞台に何を生み出すかについて考えてもらいましょう．テーマは「多世代・多国籍で生まれ変わる集合住宅」とします．ここ数年はゲスト審査委員を迎えていますが，今回はどうしますか?

藤本　「喫茶ランドリー」をプロデュースしたグランドレベルの田中元子さんはどうでしょうか．

乾　田中さんの意見は参考になるかもしれません．「喫茶ランドリー」はランドリー機能も兼ねた喫茶店で，その土地の暮らしに根付きながら，新たなコミュニティの創出に成功しています．田中さんたちグランドレベルは，「1階づくり」を専門としており，「喫茶ランドリー」以外にもさまざまなハードとソフトのデザインを行っていて，審査ではそうした実体験を踏まえた意見が聞けるのではないでしょうか．

池上　面白そうですね．では，敷地面積は1,000m^2，規模は30戸程度だと平屋形式や積層形式など，さまざまな提案を考えられるのではないでしょうか．

隈　敷地は都心とし，かつ外国人が多い地域を想定し．今回のテーマにリアリティを持って考えてほしいです．

――それでは，第13回のテーマは「多世代・多国籍で生まれ変わる集合住宅」に決定します．

（2019年6月12日，長谷工コーポレーションにて

文責：本誌編集部）

テーマについてゲスト審査委員の田中元子さんからのコメント

撮影：Takeshi Nagashima
田中元子氏.

21世紀に入って，もう20年が経とうとしています．20世紀に生まれた自分は，雨の日に傘をさしたり，ゴミを出したり，戦争やひどい事件についてニュースを見聞きしたりする度，あんなに夢見た新世紀は，ちっともやって来やしないではないか，とガッカリしたりします．しかし歴史を鑑みると，生活や文化などさまざまな意味で本格的に新世紀へと突入するのは，1年目キッカリからではなく，おおよそ20年ほどかかっている，と言われているそうです．今回このコンペに挑戦する皆さんの中には21世紀に生まれた人びとも多くなるであろうことを察するに，きっと今回，参加される皆さんによって，私たちが想像し得なかった生き方が示唆されるのではないか，と楽しみにしています．

ダイバーシティという言葉があちこちで聞かれるようになり，多様性について考えさせられる機会も増えました．今回のテーマ「多世代，多国籍」とは，まさに多様性のメタファーとも言えるでしょう．家族や友だちでさえ，自分とはまったく異なる視座を持っています．しかしヒトという生物の特性を考えると，地球の裏側まで行っても大して変わらない，普遍性を有しています．ひとりひとりが違う一回性であることと，私たちヒトが普遍性を共有することは相反し矛盾するように見えますが，実はそのことこそが，誰かと無理なく自然に生き合う，新たなかたちへの道標かもしれません．